

演題名

哺乳期初期における哺乳時の乳首及び口腔内形態変化の観察 2:口腔内における母親の乳首の形態変化の定量的分析

大杉 佳美¹⁾・齊藤 哲¹⁾・林 良寛²⁾³⁾

¹⁾ピジョン株式会社中央研究所 ²⁾石心会さやま総合クリニック小児科 ³⁾Japan Green Medical Centre

抄録本文

【目的】

哺乳時、母乳を摂取する際の、舌運動を中心とする児の口腔内の形態観察は、矢状断の超音波断層撮影(以下エコー)を用いた検討により一定の成果を得ている。一方、口腔内における母親乳首の形態変化を定量的に分析した研究はほとんどない。今回、矢状断エコーにより、口腔内における母親乳首の形態変化を観察し、定量的な検討を試みた。

【方法】

母乳哺育をしている児 9 名を対象とした(平均 GA:39.0 週/平均 BW:2970.9g/平均週齢:10.8 週)。授乳直前に、母親の乳頭・乳首サイズを計測し、哺乳開始後、児の下顎部にプローブをあて、矢状断面のエコー撮影(Prosound α 7, ALOKA 社製)および観察を実施した。倫理的配慮として、事前に文書による同意を保護者から得た。

【結果】

哺乳前の口腔外における乳首直径は平均 13.6mm($SD=1.23$ mm)であった。哺乳中、母親乳首は舌運動により変化し、エコー画像から最大時の直径を計測し、平均 10.7mm($SD=0.88$ mm)を確認した。この時、変動係数は、口腔外は 9.1、口腔内は 8.2 となった。また、乳首が舌運動により圧平された時の最大圧縮率を算出したところ(齊藤ら、2010)、平均 44%の圧縮が確認された。

【考察】

乳首サイズを定量的に分析した結果、母親乳首は、その大きさ、形状に関わらず、口腔内では、児の口腔形態に柔軟に対応して形態を変化させているものと考えられた。また口腔内での変動係数が小さいことから、口腔内での母親乳首は、児の口腔形態を反映した均一のサイズに収束する傾向が示唆された。観察例を増し、さらに詳細な検討を加える必要がある。